

お歯黒文化圏に関する試論

—日本とベトナムを事例にして

ファン・ハイ・リン

はじめに

お歯黒（鉄漿）はアジアやアフリカの部族から中米および南米の氏族まで広く普及している習慣である。フランス学者のピエール・ユアール（Pierre Huard）とモーリス・デュラン（Maurice Durand）によると、東アジアにおけるお歯黒文化の範囲は「南はインドネシア、東はソロモン・マリアナ諸島、北は日本、西は中国南部とインド南部である。インドシナではこの習慣は北緯 25 度 35 分を超えない¹」という。これは歯を守るという目的で、エナメル質に特殊な薬を塗る方法である。また、おしゃれの一つであったり、人の社会的地位、婚姻状況を示す習慣でもある。

本稿ではまず、筆者がベトナム農村で行った聞き取り調査の結果と関連資料の分析に基づき、ベトナムのお歯黒文化の全体像を描くことにする。そして、日本の習慣をまとめ、ベトナムの例と比較しながら各国におけるお歯黒文化の起源、共通点と特徴を考え、お歯黒文化圏を論じてみたい。

1. ベトナムのお歯黒

1.1. お歯黒の経緯

ベトナムにおいて、お歯黒は古代から越族に普及していた。ベトナムの考古学者はホン河・マー河流域²におけるドンソン時代（紀元前第 1 ミレニアム）の遺跡で黒く染められた人骨歯を数多く見つけた。

宋の周去非撰『嶺外代答』に「其国人烏衣、黒齒、椎髻、徒跣、無貴賤皆然³」とあるように、12 世紀後半にはベトナム人の誰もがお歯黒をしていたことがわかる。また、17 世紀に高雄徴によって書かれた『安南志原』は、15 世紀以前のベトナム人の生活を記している。なかでも、「其人或椎髻或剪髮、文身跣足、口赤齒黒、尊

1 Pierre Huard et Maurice Durand. *Connaissance du Vietnam*. EFEO, Hanoi-Paris, 1954, p. 170. [ピエール・ユアール／モーリス・デュラン『ベトナムに関する知識』極東学院、ハノイ・パリ、1954 年、170 頁]。

2 現在ベトナムの北部と中部の北地域。

3 楊武泉校『嶺外代答校注』中華書局、1999 年、59～60 頁。

卑皆食檳榔⁴』とある。

1639～1645年にベトナムのダンゴアイを訪れたオランダ東インド会社商船の士官、ダニエル・タベニヤーは、ベトナム人は歯を黒く染めればより美しさが認められると信じていると述べた。また、フランス軍の医者アルバート・サリットは、サイゴン総督の主催したパーティーで、あるベトナム人の大臣が「フランス人の女性はとても綺麗だが、歯が犬のように白い」と言ったエピソードを記した⁷。実際、お歯黒は、近代以前のベトナム人の認める美しさの表現や中国からの独立精神の表現だと見なされた。「佛頭果の種のように艶やかで、きれいな黒い歯」など、黒い歯の美しさを賛える諺があり、「呉国人の歯のような白い歯」など、白い歯を批判する諺もある。

19世紀後半にベトナムは仏領になった。お歯黒の衰退は都市から農村へ、男性から女性へと広がっていった。1954年にフランス極東学院の学者たちは『ベトナムに関する知識』の研究で、「1938年にはお歯黒はベトナムの南部でほとんどなくなり、北部でも色が浅くなってきた⁹」と記した。そして、昭和18年(1943)に日本の厚生省が出版した『南方民族図譜』に、安南族の「男子は髪を短く刈り、女子は髪を結ってターバンをまき、歯を黒く染める風がある¹⁰」という記述があるように、お歯黒は女性のみ の習慣となった。また、1966年に初めてベトナムを訪れた穴吹允はお歯黒を目撃した経験について述べている。「下宿でお歯黒にしているところを一度見せてもらったが、初めてお歯黒にする時は唇まで腫れるそうである。また、色を定着させるために、4、5日噛むものは食わず、粥や麺類のみで我慢しなければならない¹¹」と記している。彼は初めて歯を染めるのではなく、歯を染め直すところを見たのだろう。

つまり、ベトナムでは昔から男女とも歯を黒く染める習慣があった。それは人々の美しさや民族の特徴だと見なされたが、19世紀後半以降、お歯黒の習慣が徐々

4 チャン・クワン・ドック『冠と衣の千年』世界出版社、2013年、92頁。

5 ベトナムは17世紀から18世紀末まで、中部のクアンビン(広平)省のザイン河を境線に、ダンゴアイ(クアンビン省以北、トンキンとも呼ばれる)と、ダンチョン(クアンビン[広平]省からフエン[富安]省までの地域、ナムハー[南河]とも呼ばれる)に分裂していた。

6 Jean-Baptiste Tavernier. *Relation nouvelle et singulière du Royaume de Tunquin*. Paris, 1681. [ジャン・バティスト・タヴェルニエ『トンキン王国への新しくて面白い旅行』パリ、1681年、世界出版社のベトナム語翻訳、2007年、42頁]。

7 Docteur Albert Sallet. *Les Laquages des dents et les teintures dentares chez les Annamites*, *Bulletin des Amis du Vieux Hue*. 4, 1928.10-12, p. 235. [アルバート・サリット「安南人のお歯黒技術とその薬」『フエの友人』第4号、1928年10月～12月、235頁]。

8 中国人のこと。

9 ピエール・ユアール/モーリス・デュラン前掲書、170頁。

10 厚生省研究所人口民族部編『南方民族図譜』1943年、20頁。

11 穴吹允『ベトナム人と日本人』PHP研究所、1995年、23頁。

に廃れていった。

1.2. お歯黒の調査

筆者は1996年8月にベトナム北部のナムディン省タインロイ郡バックコック村でお歯黒をしている5人の農民にインタビューした。その後、2005年から2008年までハノイ市ドゥオンラム村で20人、2011年8月に中部のトアティエンフエ省フォクティク村で2人、2011年8月に南部のドンナイ省フホイ村で3人と、それぞれお歯黒についてインタビューを行った。インタビューに答えた30人はいずれも70歳以上の年配者である。そのうちで、男性は4人、女性は26人である。

インタビューした女性たちによると、昔の女性は13～17歳ごろから歯を黒く染め始めたという。男性はみな自分たちの世代は歯を染めないと答えたが、ファン・バン・ギエン氏（男性、ドゥオンラム村、モンフー集落）によると、親の世代までは男女ともに歯を黒く染めたという。北部のバックコック村やドゥオンラム村では70歳以上の女性は全員お歯黒をしているが、中部と南部では80歳以上の女性のうち、数人が歯を染めていた。

1.3. お歯黒の工程

上記の文献およびインタビュー調査に基づき、お歯黒の工程は一般的に四つのステップに分かれ、1カ月も要することがわかる。

・歯の清掃

3～5日かかる。夕食後、爪楊枝と乾燥した檳榔で歯を清掃する。その後、レモンまたは酢を希釈した水でうがいをする。寝る前に薄いレモンスライスを何枚か啜えることもある。上述した方法によって歯がきれいになり、クエン酸がエナメル質の表面を薄くし、染料がより付着しやすくなる。北部のバックコック村では、炭の粉で歯を掃除することもある。中部のヴァインとフエでは、乾燥した檳榔の代わりに炭の粉が入った布パックで歯を掃除する。¹²

・歯の赤染め

10日～15日ほどかかる。酸っぱい味がする液体の薬を指サイズの檳榔の葉に塗り、歯に貼って寝る。翌朝その薬をはがして水でうがいをする。ドゥオンラム村の人々は染料を「黄色い明礬」と呼ぶが、市場で買ったためその成分を知らなかったようだ。ナムディン省のガオ市場で薬を販売している店員によると、「黄色い明礬」の中にはレモン汁と米酢または酒が入っており、「カンキェン」という物質¹³が必ず

12 アルバート・サリット「安南人のお歯黒技術とその薬」前掲書、238～239頁。

13 カンキェンの学名は *Kerria lacca* で、貝殻虫の一種が分泌する緋色の物質である。東南ア

含まれているようだ。10日連続で染めるとエナメル質は濃い茶色に変色する。

サリットは中部と南部は北部と違って赤染めをしないと主張しているが、歯の掃除の後、数日間「カンキェン」を口で含んでから歯を染め始めると述べている¹⁴ことから、それが赤染めのような役割を果たしていたのだろう。

・歯の黒染め

エナメル質が濃い茶色になった後、黒染めに移る。この工程は3～5日ほどかかる。「黒い明礬」または「染め明礬」と呼ばれている染料を歯に直接塗るか、檳榔の葉に塗り、歯に貼って寝る。北部の「黒い明礬」の主な成分は硫酸鉄やざくろの皮、ブラックハニー低木の葉や根といった植物に含まれるタンニン質以外に、シナモン・八角・丁子などの香料も入っている。中部以南の葉は硫酸鉄や「カンキェン」以外に、甘草・檳榔の種・伽羅・井草の根なども含まれる。葉の作り方は、材料を粉碎し、酒・水と米粒を加えて小さい火で蒸し、粘稠な液体、いわゆる膠にするのである。

・仕上げ

3～5日ほどかかる。この工程に使用するのは「明礬」である。その「明礬」も、「黄色い明礬」と「黒い明礬」と同じように市場で売っていたようだ。また、「明礬」の代わりに、油分を大量に含んだ「サム」という木の皮を燃やして抽出した液体を使用することもできる。この液体を鉄の包丁にのせると黒くなる。この液体を歯に塗るとつやつやした黒い歯になる。中部では、ココナッツの皮を炭で燃やして出た黒い液体を鉄の包丁に数時間のせ、艶のある染料を作る。また、「黒い明礬」に油分を入れ、再度使用する場合もある。

歯を染める工程は家族でする場合もあれば、「歯染め師」と呼ばれる人に染めてもらうこともある。特に一部の貴族は、庶民向けに作られた「明礬」でなく、「固歯膠芳」と「固歯散」と呼ばれる高級な薬を使っていた。『明命朝太医院伝』にはそれらの薬の成分が記されている¹⁵。「固歯膠芳」とは、山檳榔以外に青礬・黒礬・五倍などの漢方薬を含む、「陳米水」や「醬水」という米のとぎ汁で蒸し固めた膠である。「固歯散」は粉状で、青礬・黒礬・白芷・三奈・甘草という五味からなる。貴族は男女ともに16歳になると、「歯染め師」に染めてもらう。歯の掃除後、数日間「カンキェン」を口に含む。酉の刻（午後5時から7時まで）に「固歯膠芳」を3～5センチメートルに切ったバナナの葉に爪楊枝のような道具で付け、歯にはめる。翌朝、薬を外して魚露でうがいをする。12日後、「固歯散」を指で歯に付ける。

ジアでは染料としてよく使われている。

14 アルバート・サリット「安南人のお歯黒技術とその薬」前掲書、244頁、246～247頁。

15 同上、244頁、244～246頁。

歯を黒く染めてから3年後に、黒色染料、いわゆる「黒い明礬」を三晩歯に塗り朝うがいをする、黒いエナメル質が強化される。その後、男性は染め直すことはないが、女性は必要に応じて染め直すことがある。

初めて歯を染める人は、口の中や唇がよく腫れる。また、歯の表面に塗った薬がうまく定着するように油ものを食べるのを控えると同時に、歯の新たな着色層を守るために硬いものや熱いものも食べない。歯を清掃する際に使用する酸（特にレモン汁とお酢）の影響により、歯の表面が薄く、過敏になる。実際、歯を染めている間は、ご飯を歯で噛むことができないので、お粥を食べるか、ご飯を水で飲み込むしかない。

2. 日本のお歯黒

2.1. お歯黒の経緯

河内国大藪古墳で原始時代の黒染状の人骨歯牙が見つかったことから、当時の日本人が歯を染めていたことがわかる。¹⁶ 3世紀末に西晋の陳寿によって書かれた『魏志倭人伝』に、倭国東方に「黒齒之國」があるとの記述があるが、日本のお歯黒に関する一番古い記録だと見なされる。そして、10世紀に日本で編集された『和名類聚抄』には、「歯黒国、在東海中、其土俗以草染齒、故曰黒齒 俗云波久路女」と記される。¹⁷

古代において、お歯黒は貴族の男子と女子の風習だった。『古事記』はお歯黒を賛美し夢に例えた。¹⁸ 武士たちが台頭すると公家の真似をして歯を黒く染めるようになった。12世紀末には、鎌倉幕府が上下を区別するため下級武士に対し歯を染めるのをやめさせ、上級武士と女性だけに歯を染めるのを許したという。彼らは8、9歳になると鉄漿付という方法で初めて歯を染めた。戦国時代から江戸時代にかけて、お歯黒は公家の一部と既婚女性専用の習慣となったが、鉄漿付の年齢は13歳から17歳へと段々遅くなっていった。明治3年（1870）には華族に対するお歯黒の禁止令が出された。その3年後（1873）、明治皇后が文明開化を宣伝するために、自らお歯黒をやめたが、地方ではこの習慣が昭和後期まで続いた。

2.2. お歯黒の工程

お歯黒の染料に関しては、お歯黒の産地である香登出身の島村壺の研究が挙げられる。「香登お歯黒の原料は、山付子（五倍子）ローハ（緑ばん）（硫酸鉄）と蜆貝の貝灰の三種類であり、これを適量に混合して造られていた。お歯黒の原料はタン

16 原三正『お歯黒の研究』人間の科学新社、1994年、73頁。

17 同上、58～70頁。

18 同上、80～81頁。

ニンと鉄で、これを化合させると黒い色素が得られる（中略）山付子（五倍子）には五〇パーセント～七〇パーセントのタンニンが含まれており、ローハ硫酸鉄で鉄と硫酸が化合している。硫酸鉄は粉末で、水によく溶けるので、香登お歯黒は、筆に水を付けて三種混合の粉を付けて、歯に塗ると、タンニンと鉄と空気中の酸素との化学変化によって、歯が黒く染っていた。貝灰は硫酸鉄の中和と粉の乾燥剤の二役を兼ね、又このことによって、良く歯に付着したようである¹⁹とある。

出来合いの薬を買えない場合、普通の家庭でも硫酸鉄の入った鉄漿水とタンニンを別々に使って歯を黒く染めることができる。まず、タンニン質を多く含む五倍子を炒め、粉にする。そして、壺にお粥や酒、うどんを茹でた出汁、お茶などを入れ、発酵させて酢酸を作る。鉄分を加えるために釘や鉄粉を入れて酢酸鉄、いわゆる鉄漿水を作る。

昭和52年（1977）に高橋雅夫が秋田市土崎港町でインタビューした山崎スガさん（当時96歳）は日本のお歯黒文化の最後の生証人だったようだ。その調査と文献から、日本のお歯黒の工程は三つのステップに分けることができる。

・歯の清掃

ざくろなどの果物の皮を使って歯を磨くか、酒でうがいをする。

・歯の黒染め

鉄漿水を沸かして温めた後、皿や碗に出す。これを筆や爪楊枝に付けて歯に塗る。そして、五倍子粉を付けて上に塗る。鉄漿水を付けてから五倍子を付け、一遍に歯を塗る場合もある。また、鉄漿水と五倍子の粉を混合してから筆に付けて歯に塗る場合もある。

薬を塗っては吐き出す作業を2、3回くらい繰り返す。染め終わった後、タバコを吸う人もいる。

・仕上げ

お歯黒を維持するためには、毎週1回か2回薬を塗り直す必要がある。スガさんは毎日朝10時ごろに歯を染め直していた²⁰という。

3. お歯黒文化圏に関する試論

3.1. お歯黒の範囲

身体装飾は旧石器時代から始まり、三つに分類されている。それは身体加工（抜

19 香登お歯黒研究会編『香登お歯黒』1989年、53頁。

20 高橋雅夫『化粧ものがたり』雄山閣、1997年、235～240頁。

き歯や剃髪などの肉体除去、頭部変形などの形態変形、刺青などの色彫生成)、身体塗布と身体装着である²¹。お歯黒は身体塗布に属している。冒頭で、アジアにおけるお歯黒文化の範囲は、「南はインドネシア、東はソロモン・マリアナ諸島、北は日本、西は中国南部とインド南部である。インドシナではこの習慣は北緯 25 度 35 分を超えない」と記した。現在ベトナムの北端は北緯 23 度 23 分に位置するハザン省ドンヴァン県ルンク社である。つまり「北緯 25 度 35 分」というのは、現在中国との国境から広東省と広西省に 200 キロメートル以上入った範囲である。

サリットは 20 世紀初頭、極東に関する研究をまとめ、「歯を染めるのは日本からマレーシアまで、一部の黄色人種によって行われている。その技術はメラネシア地域から来たと思われる。マリアナ諸島の住民は植物を使った結果として歯が黒く、髪を白く染めて美しさを表現した。ソロモン諸島やジャヴァの住民は液体の薬を使って歯を染めている。また、中国の一部でも見られ、女性は歯を染めたり、金属でピカピカ包んだりする。日本人も歯を染めたし、今でも染めているようだ²³」と述べた。

原三正はお歯黒圏の仮称を提唱し、「南方の黄色人種の大部分が、歯牙黒染の風を有していたことがうかがい知られる。ただ、大陸民の漢族・蒙古族・満州族・韓族・ギリヤーク族等に涅歯の風習がないのは、かえって奇異の感がする」と記した²⁴。しかし、ベトナムの事例を見ると、そのマッピングが正確でないところがある。現在ベトナムの人口の 80% 以上を占める越族(京族ともいう)は、古代から歯を黒く染めていた。北部と中部の山地に住んでいるルー族・ザオ族・ヌン族・モン族・ムオン族などの少数民族も歯を黒く染めている。しかし、クムー族・ブル族・エデ族・チャム族・クメール族らは、一部キンマ・檳榔を噛む習慣があるが、歯を染めていない。

つまり、アジアにおけるお歯黒の範囲は、一部の少数民族を除き、北は日本、南はインドネシア、西は中国の広東省、広西省の南部とインド東南部、東はソロモン・マリアナ諸島であるといえよう。

3.2. ベトナムのお歯黒の起源——キンマ・檳榔を噛む習慣との関係

ベトナムに来た外国人の大部分は、安南人の黒い歯はキンマ・檳榔を噛む習慣によるものと判断していた²⁵。同じ判断をするベトナム人も少なくない。しかし、実際、キンマ・檳榔を噛まずに歯を黒く染める民族もあれば、逆にキンマ・檳榔を噛むが歯を染めない民族もいる。

21 原三正『お歯黒の研究』前掲書、12～13頁。

22 ビエール・ユアール／モーリス・デュラン『ベトナムに関する知識』前掲書、170頁。

23 アルバート・サリット「安南人のお歯黒技術とその薬」前掲書、226頁。

24 原三正『お歯黒の研究』前掲書、94～97頁。

25 アルバート・サリット「安南人のお歯黒技術とその薬」前掲書、230～232頁。

フランス人のユアールとデュランは「注意すべきは、お歯黒とは、キンマ・檳榔を噛むことによってではなく、特定の薬によって染められることである²⁶」と述べ、東南アジアにおいても、この二つの習慣が必ずしも結びつけられるわけではないと主張した。また、アルバート・サリットも、キンマ・檳榔を噛む習慣の有無を問わず、アジア人は人種学的に歯が弱いので温度や接触で歯を痛めることを防ぐために歯のエナメル質に特殊な薬を塗る方法が確立された、と解説した²⁷。

著者の行った調査では、男性4人はいずれも歯を染めないが、キンマと檳榔の実を噛んでいる。北部のバックコック村やドゥオンラム村では40代と50代の男女のうち、約50%がキンマと檳榔の実を噛んでいるが、特にお祭りまたは冬の農作業の間に噛む習慣が守られている。キンマや檳榔の実は歯の染料ではないが、キンマ・檳榔を噛むことで黒く染めた歯をより黒くし艶を出すことができる。ベトナムにおけるキンマの葉と檳榔の実を噛む習慣は、夫婦・兄弟の変わらぬ愛情を賛美する「檳榔傳²⁸」に象徴されるので、結納や結婚式で檳榔をお互いに食べさせることにより、夫婦・兄弟の永遠の愛を再確認する儀礼となる。

現在、ベトナムの農村ではキンマと檳榔樹がまだかなり植えられている。ドゥオンラム村の年配者は、キンマは乾燥した葉より新鮮な葉の方が美味しいと言っている。1688年にベトナムへ来たイギリス人旅行家のウィリアム・ダンピアも「ベトナムのダンゴアイで栽培されるキンマはインドシナで一番美味しく、産出量が多い。この地の人々は緑色で、若くて柔らかいキンマの葉を好む。それは水分が多く含まれているからである。他の地域では硬くて乾燥したキンマの葉を噛む²⁹」と述べている。しかし、檳榔の実は、夏には新鮮なもの、冬には乾燥したものを使う。檳榔は7、8月ごろから実り始め、10、11月に実が一番多く取れる。ベトナムの18世紀の学者であるレ・クイ・ドン（黎貴惇）の著書『撫邊雜録』には、「廣平俗一檳榔下植苗藤蔓³⁰」、「嘉定最多榔諺云粟一榔二方民常不服收合自老摘核下售北客³¹」とある。フランス人のダニエル・タバニヤ氏によると、多くのアジア人同様、ベトナムのダンゴアイ地域の人々は檳榔の実が好きである。1日に檳榔の実を100個噛む人も

26 ピエール・ユアール／モーリス・デュラン『ベトナムに関する知識』前掲書、170頁。

27 アルバート・サリット「安南人のお歯黒技術とその薬」前掲書、232～234頁。

28 『檳榔傳』は、13世紀半ばに陳世法によって編集された説話集で、15世紀末に武瓊（校正）と喬富（刪定）によって出された『嶺南摭怪』の伝説の一つである。「檳」と「榔」という兄弟の愛と、「檳」と妻の夫婦愛を賛美する。1990年に『嶺南摭怪』は文学出版社から出版された。

29 William Dampier. *Voyages and Discoveries*. The Argonaut Press, 1931. [ウィリアム・ダンピア著『航海と発見』アルゴノートプレス、1931年、世界出版のベトナム語翻訳、2007年、42頁]。

30 黎貴惇『撫邊雜録』第2巻（『黎貴惇選集』第3巻）教育出版社、2007年、481頁。順化は、現在のベトナム中部のクアンビン（広平）省、クアンチ（広治）省とトアティエン・フエ（承天・化）省の一地域である。

31 黎貴惇『撫邊雜録』前掲書、543頁。嘉定（ザディン）省は、現在のベトナム南部に位置する。

いる。家に居ても、外出していても、農作業をしていても常に檳榔の実を噛む。友人の家を訪ねた時に檳榔の実が出なければ、大問題であったようだ³²。実際、1980年代以前には、中部のフォクティク村と南部のフホイ村の多くの家庭で数百本の檳榔樹を植えていた。檳榔の実を、夏は生で、冬は乾燥させて商人に売り、ベトナム各地だけでなく、中国・台湾まで運んでいたようだ。1年中噛めるように、女性たちは檳榔の実を小さく切り、乾燥させて保管する。また、檳榔の実を砂糖と炒めて保管する方法もある。

上記のように、檳榔の実を噛めば、虫歯の予防や口内の掃除、消化器官の病気の予防などの効果もある。また、キンマの葉・檳榔の実・「チャイ」の木の皮に含まれる成分の結合によって辛味が生まれるので、嗜好品にもなる。冬には身体を温める効果もあり、唇が赤くなって頬がピンク色になる。通常、二つか三つに切ったキンマの葉に石灰を塗り、四つか六つに分けた檳榔の実と「チャイ」の皮を巻いて食べる。濃い味が好きな人はタバコの葉を入れて食べる。祭礼の時には、鳳凰の羽のモチーフに切りとったキンマの葉で檳榔の実とチャイの木の皮を丁寧に包んだものが、漆絵のお盆などの上に円形に並べられる。年配者や若い女性が客人を檳榔とお茶でもてなし、客人が檳榔とお茶を楽しんでいる間に詩を読んだり歌を歌ったりする風景は、現在でもベトナムの農村でよく見かけられる。

つまり、檳榔樹とキンマが植えられたインドや東南アジア諸国に住んでいる多くの民族の間に、キンマ・檳榔を噛む習慣が流行っていた。しかし、それによって歯は茶色になるが、黒くはならない。ベトナムの場合は、キンマ・檳榔を噛む習慣が歯を黒く染めるきっかけになり、キンマ・檳榔を噛むことでお歯黒を維持したと筆者は考える。

3.3. 日本のお歯黒の起源

日本のお歯黒の起源については、大阪大学名誉教授の山賀礼一が、大陸渡説・南方渡説・日本古來說という三つの説を提示している³³。化粧を研究する高橋雅夫は日本古來說の事例として、岩手県水沢町付近の山ブドウを食べる習慣や、富山県婦負郡野積地方に伝わる女性の胸にいる蛇を抑えるために黒鉄を呑む習慣や、福岡県田川地方に伝わる赤ん坊に恐怖心を感じさせないようにお母さんが歯を黒く染める習慣などを挙げている。ただし、彼は普遍的な説は南方伝來說であると強調した。お歯黒は元々檳榔とキンマを嗜好品として噛む南方民族の風習から始まり古代日本に伝来したが、日本に檳榔樹とキンマがないため、タンニン質を含む五倍子と硫酸鉄を含む鉄漿水で歯を黒く染めるようになったという³⁴。

32 ジャン・バティスト・タヴェルニエ『トンキン王国への新しくて面白い旅行』前掲書、49頁。

33 香登お歯黒研究会編『香登お歯黒』前掲書、147～153頁。

34 高橋雅夫『化粧ものがたり』前掲書、208～211頁。

また、島村岬は、香登のお歯黒は天平勝宝5年(753)に唐の僧鑑真和上がもたらした製造法から始まったと主張する³⁵。実は、鑑真和上は5回も渡日に失敗している。6回目ようやく成功したが、5回目(748年)は海南島の振州まで漂流した。その地方は前述のお歯黒の範囲内にあるので、鑑真和上がその地域の薬の製造法を日本に伝えた可能性が考えられるのだろう。

3.4. お歯黒の原則

日本とベトナムで使われるお歯黒の原料は異なるが、共通した原則がある。

まず、染める前に歯を酸(特にレモン汁とお酢)や酒で清掃することである。それは、クエン酸がエナメル質の表面を薄くし、染料をより付着しやすくするためである。その他、檳榔やざくろなど果物の皮を使って歯を磨くことも共通する。

次に、黒くて粘り気のある染料を作るために、植物に含まれるタンニン質と青礬と黒礬あるいは緑バンと呼ばれる硫酸鉄を主な原料として使うことである。米粒や醬水、うどんを茹でた出汁は染料の定着を高める効果がある。

また、石灰や貝灰はタンニンと硫酸鉄の中和や粉の乾燥剤といった二役を兼ねる。

しかし、ベトナム人はキンマ・檳榔を噛むことによって黒く染めた歯をより黒くし艶を出すことができるので、2、3年のスパンで歯を染め直すだけで済む。ただ、まったく染め直さない場合もある。それに対し、日本ではキンマ・檳榔を噛むことができないため、週に1〜2度染め直す必要があるだろう。

3.5. お歯黒の役割

お歯黒には時間も労力もかかるが、ベトナムと日本で長く維持されたのには、その習慣に科学的・社会的な意味があるからだ。

歯を黒く染めるのは、歯の表面を磨くということだけでなく、鉄イオンが歯質のリン酸カルシウムの結晶を強化し、タンニンが歯質タンパク質を収斂させ虫歯を防止するという役割もある。

また、お歯黒は社会的な意味も持つ。日本でもベトナムでもお歯黒をするのは、美しさの条件の一つとなったからだ。ベトナム人は、自国の習慣を他の国、特に中国と区別することにより、自尊心と愛国心を高めてきた。18世紀にタンホア省トハック村で行われた出陣式においてグエン・フエ王が、清軍を追い出しベトナム人の習慣を守る決意を表明するために「長い髪のために戦おう！ 黒い歯のために戦おう！」と宣言したのは、その証左である。それに対し、日本ではお歯黒をするか否かは、その人の社会的な地位や婚姻の状況に左右された。

35 香登お歯黒研究会編『香登お歯黒』前掲書、32〜33頁。

3.6. お歯黒の衰退

日本では明治3年(1870)に華族に対するお歯黒の禁止令が出された。それは、「日本国民の習慣の中で、最も嫌悪を覚えたのは、既婚女性が歯を黒く塗り、眉毛を剃る習慣である(中略)夫が妻のことを心配して考案したもので、世間の目から妻を守るのにこれほど適した防御法は他にない³⁶」といった文明の西洋人の批判を深刻に捉えた明治政府の対策だったと考えられる。

ベトナムでも日本と同様に、西洋文化の影響がお歯黒衰退の主な要因だった。18世紀以降にベトナムに来た西洋人の中には、「当地の人々の一般的な習慣はキンマ・檳榔を噛むことである。それにより彼らの唇は赤く、歯は黒くなり、外観が自然のままに比べてエレガントに見えなくなる³⁷」と批判する人が少なくなかった。19世紀の後半からベトナムはフランスの植民地となったため、西洋の文化と価値観が人々の生活を大きく変化させた。インタビュー調査の結果によると、男性はたいてい20世紀に入ると歯を染めなくなった。女性の場合は、中部以南で1930年代まで歯を黒く染め続けたが、北部では1940年代までお歯黒を続けていた。現在、お歯黒をする年配の女性はその最後の世代であるといえよう。

おわりに

現在、ベトナムでは歯を染める習慣はなくなったが、農村を訪ねれば歯を黒く染めたお婆さんたちをまだ見ることができる。檳榔の実を噛む習慣が急に減り、お歯黒をする人が70歳以上である状況を考えると、歴史学・民族学・医学など多く分野の研究者が連携した「お歯黒の全国調査」が喫緊の課題だといえよう。それにより、ベトナム人が昔から認める美しさだけでなく、それに関連する伝統や社会関係、人と自然との関係などを深く理解することが可能になるだろう。また、日本との比較というように研究範囲を広げることにより、中国文化圏や西洋文化圏の影響を受ける前にアジアの大部分に存在していた「お歯黒の文化圏」の範囲、その本質と多様性、そして各地域の特徴なども理解できると期待される。本稿はその一つの試論に過ぎないものである。

36 『ディアス・コバルピラス日本旅行記』(大垣貴志郎と坂東省次訳)新異国叢書、雄松堂書店、1983、198、199頁。

37 John Barrow. *A voyage to Cochinchina in the years 1792-1793*. London, 1806, p. 81. [ジョン・バロー著『1792～1793におけるインドシナへの旅行』ロンドン、1806年、81頁]。

主要参考文献

- 穴吹允『ベトナム人と日本人』PHP 研究所、1995 年
- William Dampier. *Voyages and Discoveries*. The Argonaut Press, 1931 [ウィリアム・ダンピ
ア『航海と発見』アルゴノートプレス、1931 年、世界出版のベトナム語翻訳、
2007 年]
- 香登お歯黒研究会編『香登お歯黒』1989 年
- 厚生省研究所人口民族部編『南方民族図譜』1943 年
- Docteur Albert Sallet. *Les Laquages des dents et les teintures dentaires chez les Annamites*,
Bulletin des Amis du Vieux Hue 4, 1928.10-12 [アルバート・サリット「安南人のお歯
黒技術とその薬」『フエの友人』第 4 号、1928 年 10 月～12 月]
- Jean-Baptiste Tavernier. *Relation nouvelle et singulière du Royaume de Tunquin*. Paris, 1681 [世
界出版社のベトナム語翻訳、2007 年ジャン・バティスト・タヴェルニエ『トンキ
ン王国への新しくて面白い旅行』パリ、1681 年、世界出版社のベトナム語翻訳、
2007 年]
- John Barrow. *A voyage to Cochinchina in the years 1792-1793*. London, 1806 [ジョンバロー
『1792～1793 におけるインドシナへの旅行』ロンドン、1806 年]
- 高橋雅夫『化粧ものがたり』雄山閣、1997 年
- チャン・クワン・ドック『冠と衣の千年』世界出版社、2013 年
『ディアス・コバルビアス日本旅行記』（大垣貴志郎と坂東省次訳）新異国叢書、雄松
堂書店、1983 年
- 原三正『お歯黒の研究』人間の科学新社、1994 年
- Pierre Huard et Maurice Durand. *Connaissance du Vietnam*. EFEO, Hanoi-Paris, 1954 [ピエー
ル・ユアール／モーリス・デュラン『ベトナムに関する知識』極東学院、ハノイ・
パリ、1954 年]
- 黎貴惇『撫邊雜録』第 2 卷（『黎貴惇選集』第 3 卷）教育出版社、2007 年